

講義資料

婚配機密 (聘定式・戴冠礼儀)

【正教要理より婚配について】

婚配は、機密である。婚配機密において新郎と新婦は、司祭と教会の前で、互いに夫婦の誠を誓い合う。彼らの夫婦としての結びつきは、主ハリストスと教会の結びつきを象ったものとして祝福される。また、子供を産み、ハリスチアニンとして養育するという繋い願ひに対し、神の恩寵を請う。

【婚配機密の目的と意味】

- ・婚配は、家族、親族、民族、国家の始めであり、核である。
- ・婚配は、神が樂園において男を援ける者として女を造られた時に、神自身によって祝福された機密である。
- ・婚配において夫と妻は、一体になることにより、二つの人格が互いに補い合い、より満たされた完全な存在となることができる。
- ・夫は妻を、ハリストスが教会を愛するように愛さなければならない。妻は夫に、教会がハリストスに従うように従わなければならない。
- ・婚配 —— それは、家庭における教会の基であり、子供が愛というものを学ぶ最初の学校である。
- ・ハリスチアニンの家庭 —— それは善行を実践する学校である。愛によって結ばれている夫婦は、互いに善き影響を与え合い、自己を犠牲にしても互いの足りない部分を補い合うべきである。自己犠牲は、家庭生活において必要不可欠な要素であり、信仰生活における偉業である。それ故、婚配機密の中で「聖なる致命者は、よく難を受けて栄冠を被るもの、主に祈り給え、我が霊を救わんことを」と歌われる。自己愛を廃し、自分の隣と神に仕えるという意味において、婚配は致命者の偉業と並ぶものとされる。
- ・教会は婚配における汚れない純潔を絶対とする。また、夫婦間における禁欲は、齋期において実践されることが望ましい。

【婚配機密の歴史】

- ・ハリスチアニンの婚配の際に祈祷が行なわれる習慣は、使徒時代から始まった。聖使徒イオアンの弟子である奉神者聖イグナティは、「結婚する者は、主教の祝福を受けるべきである。結婚が肉体的な欲に依るものでなく、主・神におけるものであるためである」と書き遺している。

- ・現在、婚配機密は聘定式と戴冠礼儀から成る。昔は聘定式(婚約式)は、戴冠礼儀の前に別に行われ、教会の奉神礼ではなく、民衆的な行事であった。聘定式が教会の奉神礼として行なわれるようになったのは、10～11世紀のことである。聘定式が行なわれる場所は、聖堂の入口である。(函館復活聖堂で言えば、ろうそくカウンターの辺り)。
- ・昔、戴冠礼儀は聖体礼儀の間に行われた。その名残を今日の奉神礼に見ることができるのは、先ず、最初の発放が「父と子と聖神^oの国は崇め讃めらる、今もいつも世々に」という聖体礼儀の発放で始まること。そして続いて大連祷が唱えられ、使徒経、福音経が読まれ、重連祷の後天主経という奉神礼の流れが聖体礼儀と同じである。戴冠礼儀の中で葡萄酒を飲むのは、聖体拝領の部分の名残である。
- ・冠が用いられるようになったのは、四世紀である。元々は、オリーブの枝など萎れにくい植物を編んで用いた。戴冠礼儀の後、新郎新婦は7日間冠を着け、8日目に脱冠の祈禱を行なった。現在、脱冠の祈禱は、戴冠礼儀の最後に行なわれるが、聖事経には「婚配後第八日目に之を行なう」という注意書きが名残として遺っている。
- ・戴冠礼儀が聖体礼儀から分離したのは、12～13世紀である。現在、戴冠礼儀は、聖体礼儀の後行なわれる。
- ・ちなみに婚配機密は、私祈禱である。基本的に「奉事経」を用いて行う祈禱(教会が衆人を招いて行う祈禱)を「公祈禱」と言い、「聖事経」を用いて行う祈禱(個人的な必要に依って、教会に願い出る祈禱)を「私祈禱」と言う。洗礼式や埋葬式なども私祈禱である。

【婚配機密の奉神礼と聖歌】

- ・婚配機密は、必ず聖堂において行なわれなければならない。また、聖体礼儀の後に行うことが望ましい。
- ・聘定式のポイントは指輪の交換である。
- ・指輪は、聘定式が始まる前に、宝座の上で成聖される。宝座の上では、銀の指輪(新郎ものとなる指輪)は金の指輪(新婦のものとなる指輪)の右に置かれる。宝座の上で成聖されることによって、新郎新婦が全知全能の神の手によって結び付けられ、彼らの人生が神に委ねられることを表す。
- ・司祭はろうそく持ちの先導に依り王門より出で、十字架と福音経を聖堂中央のアナロイの上に置く。これによって、主ハリストスが見えずして奉事することを表す。
- ・指輪は、新郎新婦ともに右手に着けられる。
- ・聘定式の聖歌のポイントとなるものは、入堂の聖歌。その他は基本的に連祷。
- ・戴冠礼儀に移る際、新郎新婦は点灯されたろうそくを持ち、司祭の高聲「我等の神や、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す」の後、司祭の先導に従い、中央のアナロイの前まで進む。聖事経には司祭が第127聖詠を歌うよう記されているが、現在の習慣では行なわない。本来は附唱である「我等の神や、光荣は爾に…」の部分のみを聖歌隊が歌う。

・司祭と新郎新婦との問答(「他の女に約束はありませんか」。「約束はありません、尊神父や」。「他の男に約束はありませんか」。「約束はありません、尊神父や」。云々)の後、司祭の発放「父と子と聖神^oの国は…」によって戴冠礼儀が始まる。

・戴冠礼儀のクライマックスは、他ならぬ戴冠の場面である。「神の僕(聖名)、神の婢(聖名)に婚配せらる、父と子と聖神^oの名に因りてなり」、「神の婢(聖名)、神の僕(聖名)に婚配せらる、父と子と聖神^oの名に因りてなり」の後、「主我等の神や、彼等に光栄と尊敬とを冠らせ給え」(三次)の発放が行なわれ、ポロキメン、使徒経へと進む。

※前記の「婚配せらる」の原語は「戴冠せらる」となっており、この場面で新郎新婦の頭上に冠が載せられる。ここから「戴冠礼儀」という名称が出ている。

・新郎新婦が葡萄酒の杯を飲んだ後、司祭は、彼らの右手を取り、エピトラヒリで被い、聖堂中央のアナロイの廻りを三人で一緒に三回廻る。この時、聖歌隊は一周目に「イサイヤ、慶べよ…」、二周目に「聖なる致命者や…」、三周目に「ハリストス神や、爾を讃陽す…」を歌う。境目無く続けるのではなく、各周をきっちりと言い分けると美しい。各周の始めに司祭の発放を高聲で入れるとメリハリがついて、一層美しい。

・戴冠礼儀の聖歌のポイント

1)「我等の神や、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す」または「**Слава, слава, слава Тебе Боже наш, слава Тебе**」

2)ポロキメン「その頭に栄冠を冠むらし、生命を爾に願いしに、彼らに給えり」。

3)天主経

4)「イサイヤ、慶べよ…」、「聖なる致命者や…」、「ハリストス神や、爾を讃陽す…」

5)幾年も

以上は、いずれも短い曲であるが戴冠礼儀に華を添える聖歌として重要。ロシア正教会で歌われてるの曲なども見て、歌い易く華やかな曲を選曲すると良い。

また、事情に依って単音聖歌となる場合も、日本正教会で発行されている四部の楽譜から主旋律を取って対応することができる。

(資料作成:スヴェトラナ山崎ひとみ)